

《論 文》

聖書に学ぶビジネス学

—— モーセの律法を中心に ——

山 下 雅 弘

はじめに

神は「すべて」であり、「すべての存在のすべての可能性」であると考えます。神はわたしたちが気付いていないことを象徴しているのかもしれない。また、神は「はじめ」であると考えます。

本文では、聖書を論理的、現実的に解釈し、ビジネスに関係すると考えられる箇所を一部引用し、その直後に解説しました。究極的には神のためになることが幸いです。

現代人は現代のルールに従うべきであり、差別には反対です。聖書の引用には、「新共同訳聖書」を用います。

本稿は、モーセの律法を中心に扱います。

創世記 1 章

1 初めに、神は天地を創造された。

2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。

3 神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。

- 4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、
5 光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

わたしたちは他の動植物と同様に自然の光によって生かされています。混沌としました、暗い状況では、明るい言葉が組織を作ると考えます。暗い時に暗いことを言いますと雰囲気が悪くなる可能性があります。明るい言葉を使いますと雰囲気が変わります。また、わたしたちがマイナスであると考えた状況も大切な過程であると考えます。暗い状況の中に明るさを見出すことも大切であると考えます。

「光あれ。」から天地が創造されたと仮定しますと、「何かができろ。」と言いますとできるとも考えられます。その具体的な一つ一つの言葉は、「こうしてみましよう。」などの肯定的なものであると考えます。それらを積み重ねることにより家庭や企業や学校、国などができると考えます。一つ一つの選択が未来を作ると考えます。また、解決策を出すだけでなく人の思いを受け止めることも大切です。すべてが自分から始まるのではないという考えも持つことができます。

この物語の続きで第六の日で人が造られるまでに生物が誕生した順序は、進化によって生物が発生した順序と似ています。

創世記 2 章

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

土がなければ人は誕生しなかったと考えます。土は様々な存在を生み出し、帰しもあります。

創世記 2 章

15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。

人は自然に働きかけ土を耕し守ります。それができるのが他の動植物とは異なる人間の特徴で能力ですが、それは自然を含めた神を支配するためではなく、その秩序を守るためでなければならないと考えます。

創世記 2 章

16 主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。

17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

人間は、知識を得て価値判断を下し自分の判断で善悪を決めることができます。そのことは魅力的で素晴らしいことであると考えます。神に従わないようなこともできないことはありません。いかにも自分たちに力があるように考えやすいです。その代わりいつか死ななければならない特徴を持ちます。人の思いや見識が物事の見方を狭めていることがあるかもしれません。自分が正しいと考えることを言う時は少し控え目が良いことがあるかもしれません。

何でも反対して良いわけではありません。善悪の判断は、本当は人間がしてはならないのかもしれませんが。また、しない方が良くなっていくことがあるかもしれません。

創世記 3 章

1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。

蛇は女に言った。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

2 女は蛇に答えた。

「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。」

3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

4 蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。」

5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ。」

6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

創世記 3 章

20 アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。

21 主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。

22 主なる神は言われた。

「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」

23 主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。

24 こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

実際に蛇と人が会話できるとは考えられません。この物語は人間の性質の一つを説明していると考えます。蛇は極めて低姿勢です。その蛇がいかにも正しいことを言っているかのようです。この物語で神様は「触れてもいけない」とまでは言われていません。善悪の知識の木から実を取って食べ善悪を知るようになったと同時にエデンの園から追放されたとのことです。

人間は、神に近づく知識を獲得できると同時に神から遠ざかった存在でもあると考えます。

創世記 4 章

4 アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、

5 カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。

自分がこうすれば必ず評価され報われると考えたこととは違う評価が出ることはあり得ることです。献げ物は自分の力だけで生産したのではなく感謝を持って献上するべきものであると考えます。周囲に受け入れられることが望ましいですが、受け入れられないこともあります。自分の思う通りにならなくても認める部分を持つ必要があると考えます。

創世記 5 章

1 これはアダムの系図の書である。

神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ、

人には自然の秩序や環境、先祖が作られましたものを受け継ぎ発展させ、伝統を形成していく役目もあります。自然から影響を受けています。

前の代から様々な影響を受けています。非常に長い年月を経てわたしたちが存在していることを系図から感じ取ることができます。わたしたちが生きている期間は短いことがわかりますし受け入れなければならないことが多いです。自分の命は自分だけのものではないとも考えられます。世代間の協力関係です。今いる人だけで良くなっているのでもないと考えます。人間から見ました短期間の発展だけではなく、長期的な発展も考えなければなりません。防災も永くかけてできます。日本にも永く続く家系があります。

創世記 6 章

5 主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、

6 地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。

7 主は言われた。

「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」

8 しかし、ノアは主の好意を得た。

9 これはノアの物語である。その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ。

10 ノアには三人の息子、セム、ハム、ヤフェトが生まれた。

11 この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。

12 神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた。

13 神はノアに言われた。

「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。

14 あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つ

も造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。

15 次のようにしてそれを造りなさい。箱舟の長さを三百アンマ、幅を五十アンマ、高さを三十アンマにし、

16 箱舟に明かり取りを造り、上から一アンマにして、それを仕上げなさい。箱舟の側面には戸口を造りなさい。また、一階と二階と三階を造りなさい。

17 見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。

18 わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。

19 また、すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。

20 それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい。

21 更に、食べられる物はすべてあなたのところに集め、あなたと彼らの食糧としなさい。」

22 ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした。

創世記7章

1 主はノアに言われた。

「さあ、あなたとあなたの家族は皆、箱舟に入りなさい。この世代の中であなただけはわたしに従う人だと、わたしは認めている。

2 あなたは清い動物をすべて七つがいつつ取り、また、清くない動物をすべて一つがいつつ取りなさい。

3 空の鳥も七つがいつつ取りなさい。全地の面に子孫が生き続けられるように。

4 七日の後、わたしは四十日四十夜地上に雨を降らせ、わたしが造った

すべての生き物を地の面からぬぐい去ることにした。」

5 ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。

6 ノアは六百歳のとき、洪水が地上に起こり、水が地の上にみなぎった。

7 ノアは妻子や嫁たちと共に洪水を免れようと箱舟に入った。

8 清い動物も清くない動物も、鳥も地を這うものもすべて、

9 二つずつ箱舟のノアのもとに来た。それは神がノアに命じられたとおりに、雄と雌であった。

10 七日が過ぎて、洪水が地上に起こった。

11 ノアの生涯の第六百年、第二の月の十七日、この日、大いなる深淵の源がことごとく裂け、天の窓が開かれた。

12 雨が四十日四十夜地上に降り続いたが、

13 まさにこの日、ノアも、息子のセム、ハム、ヤフェト、ノアの妻、この三人の息子の嫁たちも、箱舟に入った。

人が心に思い計ることは主にとっては必ずしも良いとは言えないと考ええます。繁栄したものが衰退することはあります。拡張したものを縮小しなければならないこともあります。急拡大が問題に繋がることもあります。人間が極端な偉業を果たそうとしますと環境破壊に繋がる可能性があります。特定の動物だけが極端に増えますと後に減少に繋がることから考えられます。この物語で箱舟に入った動物の数のバランスが良いです。わたしたちは様々な条件が揃って生かされます。信仰を持つことも生きるために必要であると考えます。情報の取捨選択が必要なこともあります。

環境を守るとはわたしたちのためでもあります。環境を守る、自然に適応した動植物が生き残ることができると考えます。

洪水には十分な警戒が必要です。

創世記 8 章

21 主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。

「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。

人は心に何かを思います。あまりあれこれ思わず今を精一杯生きるのが望ましいかもしれません。人に対して厳しいですがそれでも生かされていますのが人であると考えます。

創世記 8 章

22 地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも

寒さも暑さも、夏も冬も

昼も夜も、やむことはない。」

自然は半永久的に存続し、漸次的に変化し循環すると考えます。

創世記 11 章 バベルの塔

1 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。

2 東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。

3 彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。

4 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

5 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のある町を見て、

6 言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らは何を企てても、妨げることはできない。

7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

8 主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。

9 こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

人々は、「石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。」ような技術や経済力等によって高い塔を建てるようになります。しかし、それは仕えるためでなくてはならないと考えます。土も森林も田畑もアスファルトもあるのが望ましいと考えます。4節のような思いは問題に繋がると考えます。

このように一か所に高過ぎる建造物を建設するのは望ましくないことがあると考えます。一か所に人が集中し過ぎることも望ましくないかもしれないかもしれません。分散させる必要があると考えます。「主は彼らをそこから全地に散らされた」ように、富や権力や人が集中し過ぎることを避けるべきであると考えます。

グローバル化を目指しますとともに各国の特徴を残すことも大切であると考えます。様々な国の言語があるのは望ましいと考えます。中央集権化より分権化する必要があると考えます。一極集中ではなく地方も活性化させることが望ましいと考えます。

わたしたちも所得分配をよく考えなければならないと考えます。また、一か所に権力が集中し過ぎますと、コミュニケーションが取りにくくな

りお互いに理解できにくくなる可能性もあります。理解できない人同士は無理に一つにならなくても構わないと考えます。どこでも力を発揮しようとしなければならないと考えます。

わたしたち人間が発展であると考えますことが他の存在からは正反対であることがあります。わたしたちは他の存在と共存しないと生きられない面があります。科学を極めつつ、自然と共存することが大切です。わたしたちには建物も自然も大切です。

聖書と直接関係ないかもしれませんが、日本に大文字山という山があります。お盆の八月十六日には送り火が灯され、五山の送り火として有名です。妙、法、船形と鳥居形にも点火されます。正しい起源を探りますとともに意義を考えることも重要であると考えます。国土の約四分の三を山で占める日本が経済成長を続けようとしまうとどうしても高い所まで開発しないといけなうと考えやすいです。それは正しい部分があります。しかし、毎年恒例の行事が行われますことにより少なくともあの場所のあの高さまでは開発できません。送り火が全く見えなくなるような巨大な塔を建てることも許されていません。環境保全や災害対策も重要です。わたしたちがそこは山と思っている所が川のようになることがあるのが洪水の脅威です。日本は何代にも亘り成長しています。そのようなことを認識させてくれることもやはり偉「大」です。わたしたちはそれぞれが大きい存在であると思わないために支え合い絆を作り幸せになれるところがあります。時にはわたしたちよりわたしたち以外の方が大きな存在であるとも必要です。わたしたちは普段はビジネスなどの高い目標を目指し、成功しますと大きくなつたと考えやすいです。そのようなわたしたちを見守り続けています。

創世記 15 章

18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

19 カイン人、ケナズ人、カドモニ人、

20 ヘト人、ペリジ人、レファイム人、

21 アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の土地を与える。」

土地は個人のものでもあり、家系のものでもあり、神のものでもあると考えられます。

創世記 32 章

29 その人は言った。「お前の名はヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」

聖書においてここで初めてイスラエルの名が出てきます。わたしたちはどんなことにも負けない強靱な心が必要です。

創世記 45 章

8 わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。

ヨセフは夢を解釈できる能力がありそれ故に兄たちから荒れ野の穴に投げ込まれ不遇の時期を過ごしました。しかし、逆境の中才能が生かされる時が来ます。この力によってファラオの夢を解釈し対策を進言することによりエジプトの権力者に取り立てられました。進言を聞ける王に出会えたのも幸運でした。兄たちがヨセフを売ったことを水に流し飢饉から救おうとしています。

不遇の時期を凌ぐことによって道が開けることがあると考えます。

「神との対話」について

聖書には、モーセたちの神との対話が記述されています。それは、神とのコミュニケーションであり、広い視野に立つ自問自答でもあり熟慮でもあると考えます。過去の人々のことを思うことでもあり未来の人々のことを考えることでもあると考えます。モーセは民数記20章のメリバの水の出来事以外は自分を神の座に置くことなく主の御心に従い自分だけを中心に据えることなく人々を治めています。

祈りを通して素直に感謝し見えないことにも思いを馳せます。それしか手段はないか、本当に何がやりたいか、神の御心に適っているか考えます。このように祈り続けることが発展のために必要であると考えます。

「奇跡」について

聖書には様々な奇跡が描かれています。強い驚き、喜び、大変大きい効用などが奇跡によって表現されていると考えます。現代にもフィクションはあります。

わたしたちは理解のルールを破られる出来事が起こると考えることはできます。そのことによって、神（受け入れにくいこと）に対して謙虚になることができます。

奇跡が起こることを信じて努力しますと力が出ることも考えられます。

出エジプト記7～11章について

ファラオがイスラエルの人々を強制労働からかたくなに解放しないため災いが起こり、謝り赦しを乞いますと治まり、また心をかたくなにして解放しないと災いが起こるという繰り返しになっています。最後の災

いの後、ついにファラオはモーセたちにエジプトから出て行くように言います。

強制労働は望ましいことではないと考えます。しかし、これがそういうことが起こってしまった後での主の描くシナリオになっています。

実際にはこのような因果関係は考えにくいですが、上に立つ人のかたくなさと過酷過ぎる労働をさせることが問題に繋がるがあると考えます。

出エジプト記 13 章 初子の奉献

1 主はモーセに仰せになった。

2 「すべての初子を聖別してわたしにささげよ。イスラエルの人々の間で初めに胎を開くものはすべて、人であれ家畜であれ、わたしのものである。」

ここでは初子の奉献について述べられています。他の箇所では様々な献げ物をするように主が命じています。すべてを人間が自由に支配できるわけではありません。土地や資本などの生産要素についても同じことが言えます。

出エジプト記 14 章

21 モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。

22 イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。

実際に葦の海の奇跡のようなことが起こるとは考えにくいですが、こ

こでもファラオの心のかたくなさから出兵の失敗が起こっています。尤も戦争には反対です。

出エジプト記 16 章

13 夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りました。

実際に天からパンの元が降って来るとは考えられません。しかし、わたしたちだけで食べ物を作ることはできません。食べ物は元々自然から与えられるものであることを改めて認識できます。

出エジプト記 16 章

19 モーセは彼らに、「だれもそれを、翌朝まで残しておいてはならない」と言ったが、

20 彼らはモーセに聞き従わず、何人かはその一部を翌朝まで残しておいた。虫が付いて臭くなったので、モーセは彼らに向かって怒った。

21 そこで、彼らは朝ごとにそれぞれ必要な分を集めた。日が高くなると、それは溶けてしまった。

今必要な分があれば十分であると考えなければならないと考えます。

出エジプト記 18 章

21 あなたは、民全員の中から、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上に立てなさい。

22 平素は彼らに民を裁かせ、大きな事件があったときだけ、あなたのもとに持って来させる。小さな事件は彼ら自身で裁かせ、あなたの負担

を軽くし、あなたと共に彼らに分担させなさい。

他人に任せるべきところは任せ、自分にできる仕事に集中しますと効率的です。

どんなに大きな権限を持ていましても限界があり、見方によっては、それはもう他人のものでもあると考えることもできます。

出エジプト記 20 章 十戒

1 神はこれらすべての言葉を告げられた。

わたしたちも今日のルールに従うべきですが、十戒の内容には今日でも大切なことがあります。

出エジプト記 20 章

4 あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。
5 あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、
6 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。

人の命令でも自分で考えてから判断しなければならないことがあると考えます。学問もどこかで一つに繋がっていると考えます。わたしたちは多くの目標を色々と持つ必要はないかもしれませんが。大切な目標に皆で向かうことが大切であると考えます。

神に対する態度は子孫に影響することが述べられています。わたしたちの言動は後の状況に影響を与えます。

わたしたちは山や川だけ建物だけがありましても生きられません。様々な自然の産物の中で生きられるのが人です。そのようなことが分かっていまして、つい自分たちの力だけに強く頼ることがあります。お金や損得、地位、ブランドなど一部分だけに囚われますと、真実が見えなくなる可能性があります。それぞれが重要でないというわけではありません。様々なことをどれも重視し、それらを関連付けて全体として考えることが重要であると考えます。こだわり過ぎることや何かの虜になり過ぎることも偶像崇拜かもしれません。色々なことに関心が分散し過ぎますと絆が弱くなる可能性もあります。崇拜してはいけないこともあります。地価などが高騰し続けることを信用し過ぎることも問題です。人を敬うことは望ましいことですが、敬い過ぎるのは望ましくないかもしれません。過去に執着し過ぎることも問題かもしれません。一部の対象のみを追求し獲得し過ぎますと、足りない物が生じる可能性があります。余分を追求するより獲得する必要のあるすべての財やサービスがギリギリ得られることが望ましいと考えます。何事もほどほどにしますとバランスがとれます。偶像崇拜しないとは平等に愛することでもあると考えます。

神を知るとは、任意の存在が神ではないと認識することです。わたしたちの意識が変わるということでもあると考えます。どのような一部分も主ではないと考えます。価値観を固め過ぎないことも持続可能な発展のために必要であると考えます。

出エジプト記 23 章

12 あなたは六日の間、あなたの仕事を行い、七日目には、仕事をやめねばならない。それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである。

奴隷は存在するべきではないと考えます。

わたしたちが仕事をしますと、周囲が楽になりますとともに、他の存在を働かせ、時には犠牲にしています。休日自分たちが休む日でもあり、周囲に休んでもらう日でもあります。無制限に仕事をしさえすれば良いのでもないようです。

有意義な休息があつてこそ、学びに専念でき、新しく良いものを生み出すことができると考えます。

レビ記 19 章

9 穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽してはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。

10 ぶどうも、摘み尽してはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

収穫は独占するのではなく、他人に残すことが重要かもしれません。このような考え方をしますと資源の枯渇の予防に繋がると考えます。

レビ記 19 章

18 復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

わたしたちは自分自身も愛さなければなりませんし、同じように身近な人々を愛することが大切です。

レビ記 25 章

14 あなたたちが人と土地を売買するときは、互いに損害を与えてはな

らない。

わたしたちはお互いに損害を与えてはいけないと考えます。

民数記 20 章

2 さて、そこには共同体に飲ませる水がなかったので、彼らは徒党を組んで、モーセとアロンに逆らった。

3 民はモーセに抗弁して言った。「同胞が主の御前で死んだとき、我々も一緒に死に絶えていたらよかったのだ。

4 なぜ、こんな荒れ野に主の会衆を引き入れたのです。我々と家畜をここで死なせるためですか。

5 なぜ、我々をエジプトから導き上らせて、こんなひどい所に引き入れたのです。ここには種を蒔く土地も、いちじくも、ぶどうも、ざくろも、飲み水さえもないではありませんか。」

6 モーセとアロンが会衆から離れて臨在の幕屋の入り口に行き、そこにひれ伏すと、主の栄光が彼らに向かって現れた。

7 主はモーセに仰せになった。

8 「あなたは杖を取り、兄弟アロンと共に共同体を集め、彼らの目の前で岩に向かって、水を出せと命じなさい。あなたはその岩から彼らのために水を出し、共同体と家畜に水を飲ませるがよい。」

9 モーセは、命じられたとおり、主の御前から杖を取った。

10 そして、モーセとアロンは会衆を岩の前に集めて言った。「反逆する者らよ、聞け。この岩からあなたたちのために水を出さなければならないのか。」

11 モーセが手を上げ、その杖で岩を二度打つと、水がほとばしり出たので、共同体も家畜も飲んだ。

12 主はモーセとアロンに向かって言われた。「あなたたちはわたしを信

じることをせず、イスラエルの人々の前に、わたしの聖なることを示さなかった。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない。」

水が飲めなくなると苦しいです。しかし、誰かを責め始めますと批判の連鎖が起こり止まらなくなることがあります。主に頼むことが適切であると考えます。苦しい状況に置かれた時でも神は働くということです。それは人の考えが変わるということでもあると考えます。後悔や批判をするより皆で水を探すことの方が先決です。岩の所に行きますと水があったのかもしれませんが。モーセは自分の怒りを会衆にぶつけました。怒りが湧くことはありますが、主の御心に適う感情でなければならないと考えます。怒っている間に時間が経ちます。また、水を出すのはモーセだけではできません。どんな偉い人でも人の力だけで水を出すことはできません。モーセはそのことを人々の前に示さなければならなかったと考えます。そのようなことを示すことも人間教育であると考えます。モーセは「手を上げ、その杖で岩を二度打つ」ことにより自分の手で水を出すという思いが強過ぎたと考えます。水は元々自然から与えられます。

わたしたちも苦しい状況におきましてもまず後悔や批判をするのではなく与えられている価値を皆で見出さなければならぬと考えます。水が飲めないほど苦しいと後悔や批判をしている暇はありません。そのような時わたしたちの意識が変わり自分たち以外の力の大切さを認識し適切なことができるようになると考えます。その時あるものを見つけ進むことが適切であると考えます。

民数記 28 章

18 初日には聖なる集会を開く。いかなる仕事もしてはならない。

民数記 28 章から 29 章では献げ物の規定が示されています。28 章 18 節以下「いかなる仕事もしてはならない。」と何度か語られています。仕事を控え、献げ物をする日を作るよう命じられています。

申命記 1 章 役職者の任命

9 そのころ、わたしはあなたたちに言った。「わたしは、ひとりであなたたちの重荷を負うことはできない。

10 あなたたちの神、主が人数を増やされたので、今やあなたたちは空の星のように数多くなった。

11 あなたたちの先祖の神、主が約束されたとおり、更に、あなたたちを千倍にも増やして祝福されるように。

12 しかし、どうしてひとりであなたたちの重荷、もめ事、争いを負えるだろうか。

13 部族ごとに、賢明で思慮深く、経験に富む人々を選び出なさい。わたしはその人たちをあなたたちの長としよう。」

14 あなたたちがわたしに答えて、「提案されたことは結構なことです」と言ったので、

15 わたしは、あなたたちの部族の長で、賢明な経験に富む人たちを選んで、彼らをあなたたちの長、すなわち千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長とし、また、あなたたちの部族の役人とした。

16 わたしはそのとき、あなたたちの裁判人に命じた。「同胞の間に立って言い分をよく聞き、同胞間の問題であれ、寄留者との間の問題であれ、正しく裁きなさい。

17 裁判に当たって、偏り見ることがあってはならない。身分の上下を問わず、等しく事情を聞くべきである。人の顔色をうかがってはならない。裁判は神に属することだからである。事件があなたたちの手に負えない場合は、わたしのところに持って来なさい。わたしが聞くであろう。」

18 わたしはそのとき、これらすべてのことをあなたたちのなすべきこととして命じた。

申命記には様々な規則や命令が記されています。現代でも通用する内容があります。ここでは分権化と役割分担がなされています。聖書には一つの書物の中に当時の様々な学問に当たるものが含まれていると考えます。また、学問だけでは分からないこともあるかもしれません。

現代の裁判は洗練されていますが、世の中には様々な問題があります。神に属する裁判は、「偏り見ず、身分の上下を問わず、等しく事情を聞き、人の顔色をうかがわないこと」であるようです。

申命記 1 章

38 あなたに仕えているヌンの子ヨシュアだけはそこに入ることができる。彼を力づけなさい。イスラエルに嗣業の土地を継がせるのは彼である。

土地を私有財産化することは資本主義を発展させます。しかし、一方で私有する土地を所有者がどのように使用しても良いと考えますと、資源の枯渇や環境破壊に繋がる可能性があります。その場合は、私有する土地の使い方をそれぞれの所有者が律する必要があります。

申命記 1 章

43 わたしはそう伝えたが、あなたたちは耳を貸さず、主の命令に背き、傲慢にも山地へ上って行った。

賢い人は物事を自分の頭で考え、神に反するような選択をすることもできるかもしれませんが、結果は良好であるとは限りません。

申命記 2 章

26 わたしは、まずケデモトの荒れ野からヘシュボンの王シホンのもとに友好使節を送って、こう述べさせた。

まずは友好使節を送り、相手が拒否したら攻撃するやり方が示されています。尤も戦争には反対です。

申命記 4 章

3 あなたたちは、主がバアル・ペオルでなされたことをその目で見たではないか。あなたの神、主はペオルのバアルに従った者をすべてあなたの間から滅ぼされたが、

4 あなたたちの神、主につき従ったあなたたちは皆、今日も生きている。

何かにこだわり過ぎますと、それに時間と労力を取られ過ぎ機会費用を失うことがあります。過去の人の失敗から学ぶことも重要です。

成功ばかりが続きましても最終的にはどうなるかわかりません。失敗しましても次に生かすことが大切です。

申命記 6 章

5 あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽して、あなたの神、主を愛しなさい。

これは最も重要な掟の一つであるようです。自分も周囲も愛することが重要であると考えます。

申命記 7 章

7 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民

よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。

心引かれて選ばれるのは強さのためではないことがあると考えます。わたしたちも強いから心引かれるのではないことがあります。自分たちを弱いと思う人々は特に神を求める傾向にあり心が強くなっていける可能性があると考えます。

申命記 8 章

17 あなたは、「自分の力と手の働きで、この富を築いた」などと考えてはならない。

18 むしろ、あなたの神、主を思い起こしなさい。富を築く力をあなたに与えられたのは主であり、主が先祖に誓われた契約を果たして、今日のようにしてくださったのである。

たとえ富を築けたとしても先祖や主の力が働いていることも覚えたいものです。先祖や主の意志も尊重しなければならないと考えます。繁栄のために必要なことかもしれません。昔の人が後世に残してくれたためにわたしたちが使えるものもあります。

初代の人が築いたビジネスは何代か経ちますと時代が変わり同じやり方ではうまくいかなくなるかもしれません。初心に帰りつつ時代に適応させ何かを新しくしなければならないと考えます。一番大切な中心を忘れず、メインを大事にすることを忘れないようにしなければならないと考えます。

日本には、遡りますと、昭和、大正、明治時代、江戸時代、安土桃山時代、室町時代、鎌倉時代、平安時代、奈良時代、…と歴史があります。

申命記 9 章

6 あなたが正しいので、あなたの神、主がこの良い土地を与え、それを得させてくださるのではないことをわきまえなさい。あなたはかたくなな民である。

良い土地を得られるのは得る人が正しいからではないようです。わたしたちは自分の正しさを主張しがちです。自分たちの利益を追求します。しかし、正しいと主張し過ぎますと、他人を苦しめる場合があります。全体として捉え、長い時の流れの中の価値に気付く必要もあると考えます。かたくなであることは正しくないことに繋がることもあるかもしれません。

申命記 11 章

16 あなたたちは、心変りして主を離れ、他の神々に仕えそれにひれ伏さぬよう、注意しなさい。

17 さもないと、主の怒りがあなたたちに向かって燃え上がり、天を閉ざされるであろう。雨は降らず、大地は実りをもたらさず、あなたたちは主が与えられる良い土地から直ちに滅び去る。

組織的にすべての存在の幸いを考えることなく一部分を追求し過ぎますと、滅びに向かうことがあると考えます。

申命記 11 章

18 あなたたちはこれらのわたしの言葉を心に留め、魂に刻み、これをするしとして手に結び、覚えとして額に付け、

19 子供たちにもそれを教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、語り聞かせ、

20 あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。

21 こうして、主が先祖に与えると誓われた土地にあって、あなたたちとあなたたちの子孫の日数は天が地を覆う日数と同様、いつまでも続くであろう。

永く続けなければならない教えは代々語り継がなければならないと考えます。わたしたちはそのような教えをしっかりと学び肝に銘じて置かなければならないと考えます。そうしますと組織的に繁栄は続くと考えます。そのような教えは残ると考えます。組織が永続することを目指し永く残ることをしなければならないと考えます。

申命記 12 章

29 あなたが行って追い払おうとしている国々の民を、あなたの神、主が絶やされ、あなたがその領土を得て、そこに住むようになるならば、
30 注意して、彼らがあなたの前から滅ぼされた後、彼らに従って罠に陥らないようにしなさい。すなわち、「これらの国々の民はどのように神々に仕えていたのだろう。わたしも同じようにしよう」と言って、彼らの神々を尋ね求めることのないようにしなさい。

滅ぼされた所において採られていた方法や方針などを模倣し同じようなやり方を採用してはいけないことがあると考えます。同じように滅ぶ可能性があります。

申命記 14 章

8 いのしし。これはひづめが分かれているが、反すうしないから汚れたものである。これらの動物の肉を食べてはならない。死骸に触れてはならない。

あらゆることを自由に行いますと、秩序が崩れる可能性があります。

わたしたちには自由は必ずしも多いわけではなく制限は多いですが、今できることに目を向けそれからやりますと、良い方へ向かうと考えます。

申命記 19 章 裁判の証人

15 いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない。

16 不法な証人が立って、相手の不正を証言するときは、

17 係争中の両者は主の前に出、そのとき任に就いている祭司と裁判人の前に出ねばならない。

18 裁判人は詳しく調査し、もしその証人が偽証人であり、同胞に対して偽証したということになれば、

19 彼が同胞に対してたくらんだ事を彼自身に報い、あなたの中から悪を取り除かねばならない。

20 ほかの者たちは聞いて恐れを抱き、このような悪事をあなたの中で二度と繰り返すことはないであろう。

21 あなたは憐れみをかけてはならない。命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足を報いなければならない。

犯罪について複数人の証言を聞きますとより確実に立証できます。現代日本では刑法第 169 条で偽証について書かれています。

「命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足を報い」るのは、おうむ返しです。

申命記 32 章

18 お前は自分を生み出した岩を思わず
産みの苦しみをされた神を忘れた。

わたしたち人間を超えた力があることを覚えておかなければなりません。

申命記 32 章 ネボ山に登れ

48 その同じ日に、主はモーセに仰せになった。

49 「エリコの向かいにあるモアブ領のアバリム山地のネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に所有地として与えるカナン土地を見渡しなさい。

50 あなたは登って行くその山で死に、先祖の列に加えられる。兄弟アロンがホル山で死に、先祖の列に加えられたように。

51 あなたたちは、ツインの荒れ野にあるカデシュのメリバの泉で、イスラエルの人々の中でわたしに背き、イスラエルの人々の間でわたしの聖なることを示さなかったからである。

52 あなたはそれゆえ、わたしがイスラエルの人々に与える土地をはるかに望み見るが、そこに入ることはできない。」

手段を変えますと結果が違ってきます。結果が同じでも手段が違いますと結果が違うことになることがあります。手段自身が結果であると考えられることもできます。

指導者は神の働きを実践して教えなければならないと考えます。そのようにしないと最後に力が出ないかもしれません。最後の解決は委ねる必要があります。

人間以外の力も人間を支え生かしています。

申命記 34 章 モーセの死

1 モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、

2 ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、

3 ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。

4 主はモーセに言われた。「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見えるようにした。あなたはしかし、そこに渡っていくことはできない。」

5 主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。

モーセは長期にわたり人々を指導し、苦難の末、ピスガの山頂には立つことができました。目的地は見下ろす、山を下った低い所でした。モーセにはそこに下りていく時間が残されていませんでした。モーセはカナンの地には入れませんでした。彼が指導してきた人々がそこに到達できる未来に希望を持って亡くなりました。

指導者は指導してきた人々の幸いを望めることで十分幸せなのかもしれません。

<参考文献>

青山学院大学キリスト教文化研究センター編『聖書と共同体の倫理』

2001 年

生田哲『早わかり聖書』日本実業出版社 2000 年

中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか』集英社 2008 年

中見利男著 ひろさちや監修『面白いほどよくわかる聖書のすべて』日

本文芸社 2000 年

日本聖書協会『聖書 BIBLE 和英対照 和文／新共同訳 英文／

Today's English Version』2008 年

判例六法編修委員会『模範小六法 2014 平成 26 年版』三省堂 2013 年

ここまで導いてくださいました神に感謝いたします。